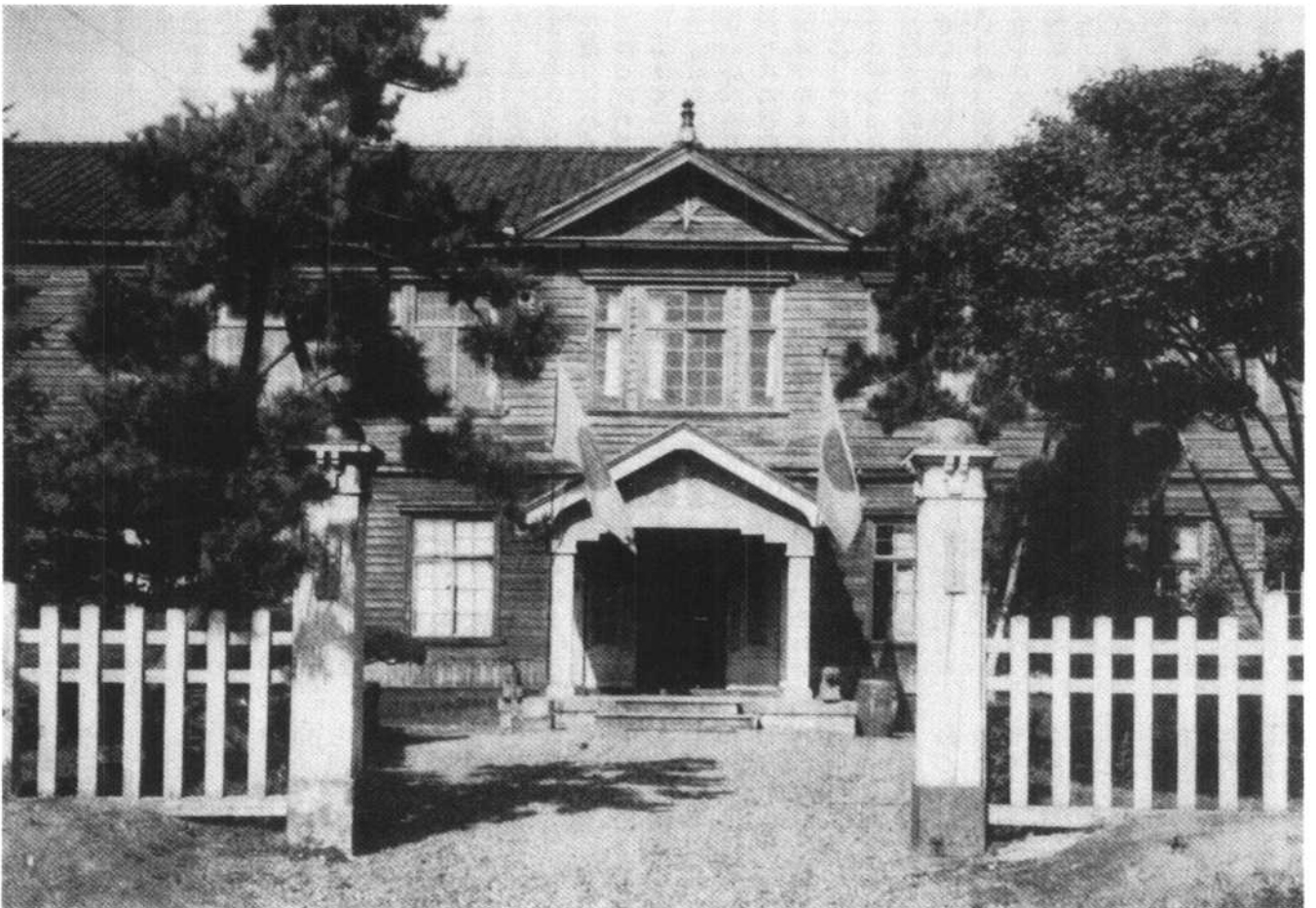


東京白楊だより

第13号
2.9.20

啖と啄 学校長 堂 高 栄 治
函館想望 支部長 篠 田 作 衛
母校新校舎建築始まる
あの「丹下左膳」は函中生れであった
第14回親睦大会 特別講演 三 浦 祐 晶



白楊ヶ丘同窓会東京支部

旧制函館中学校
函館中部高等学校

啐と啄

函館中部高等学校長

堂高 栄治



函館中部高等学校には、親子、姉妹、叔母、姪といった二代、三代、なかには四代目に当たる生徒も現在学んでいる。私も昭和三十六年から十年余り教諭として、また教頭としても勤務したのだが、その当時の教え子が本校PTAで活躍くださっていてほんとうに有難い。生徒に「お父さん元気？」「お母さんは？」と話のできるのも無上のよろこびなのである。

ところで親が優秀であっても、子どもはどうもというのあれば、またその反対の例もあって、つくづく考えさせられることがある。ご存じのように、脳生理学の権威、時実利彦博士によれば、大脳皮質に密集している脳細胞は実に一四〇億といわれ、人間の精神活動はこの細胞の複雑微妙な働きによるのであり、この精神細胞が整然として完全無欠なのが秀才、この細胞にホンの少しの瑕疵があったら、全体の働きが鈍って、所謂鈍才と

なってしまうのであろうか。所謂秀才も鈍才も紙一重、知的能力などはその子どものもつ全能力からすればホンの一部にすぎないものなのである。万人がそれぞれ、そのものだけに備わる固有の能力の持主であることを思えば、生徒のもつ能力を進路、適性、環境にに応じて伸長、開花させて、その個性を競わせるのが教師のつとめでなければならぬと改めて思料させられている。俗にいう『桃栗三年、柿八年、柚は九年で花ざかり』といわれるように、人間も「わせ」と「おくて」がある。春に咲く花があれば秋に咲く華もある。それなのに「早く芽を出せ柿の種」式に焦ってはならない、と言いきかせ、函中で学ぶ者伝統をいわず実力を誇りとせよ、骨太な人物に育ててほしい、と機会ある毎に語りかけている。

禅に、啐啄ということがある。鶏卵が孵化しようとするとき、雛が殻の内をつつくのが啐。母鶏がそれに呼応して外から殻をつつくのが啄。学ぶものと教えるものと、決して逸してはならない絶妙の好機をつかんで、両者の心が投合するとき、感動とひたむきの師弟愛が生まれる。

函中に「白楊魂」という尊い精神の宝がある。それ故函中で業を終えたもの年代を超えてこの一語に無限の親しみを感じ、同窓会に集う数、他に類をみることでできない盛況ぶりなのであるが、更に「白楊魂」の解説に師弟愛の真髓を敢えて不動のものにして、輝かしい発展の歴史を築く礎にしていきたい。

(第27代学校長 本年四月根室西高校から着任)

随想

「函館想望」

東京支部長 篠田 作衛

身びいきかも知れないが、わが故郷、道南の一角函館市周辺は、世界でも有数の景勝の地だと思う。

山野の起伏の妙、神が描いたか海岸線の曲折美、東京から渡るとすぐ判る美味しい空気と水と魚、それに北国の割には温暖で多様な四季、これ等がおりなす函館のイメージは、私が都合六年ほど滞在した欧州や、何回か訪ねた北米大陸の名勝の地と較べても、充分に比肩しうるものと思われる。

例えば、スカンジナビヤ半島の南端にスウェーデンのヘルシングボリからマルメへと続く一帯がある。その地形とたずまい、史蹟と親切な人間像、それ等が道南の感じと酷似していて、感激した思い出がある。その辺は、実はスウェーデンの富裕族が求めて余生を送る景勝の高級住宅地区であり、同時に技術開発のメッカでもあると、後から聞いた。

昨年の晩夏の頃、久しぶりに昔の雁皮平今ゴルフ場になっている辺りを訪ねて旧友達とあそんだが、そこから函館山へ対する景観は、何とも形状し難い美しさと迫力があり、あらためて懐旧心と帰巢本能をくすぐられた。往時と較べて市街地が北側に延び、グレート函館にふさわしく広域化の進んでいるのを実感できた。だが何といっても私の函中時代と大き

く変わって嬉しいのは、函館山への出入りが自由になったことである。戦時中は山の麓に鉄線が張ってあって、その辺でよく憲兵の見廻りに出喰わした。函館山頂からの景観が自由になって、故郷の魅力は倍加したような気がする。

いま日本中で話題を呼んでいる函館山頂からの夜景も、よく神戸や長崎のそれと対比されるが、質的には比較になるまいと私は感じている。夜景はネオン帯が広く大きいだけでは絵にならない。却って焦点がぼけ、散漫になる。いわずもがな、函館の夜景は、両側に暗黒の海を従えて中心部だけに不夜城が浮彫りにされている。だから迫力がある。周囲が真暗で不気味なほど、真中のハイライトがひき立つ訳で、それだけで本質的に芸術である。加えてその輪郭は、美女の肢体に似ているように感じるがどうだろう。

然し道南の素晴らしさは、夜景だけではない。例えば、とんがり屋根の聳える教会のある坂道や、ゆらぐポプラ並木や、赤い屋根のサイロと傍の牛馬の放牧など、ちよっとした点景の一つ一つも絵画的だ。だから人は道南に育っただけで、詩情と絵心が身につくのではないだろうか。心なし、函館育ちは、感性が豊かでハイセンスに思える。わが白楊ヶ丘の先輩、亀井勝一郎はある小品で、谷地頭の終点から立待岬への小路が、恋人同志の散策の道として日本一相応しい、函館人の青春劇は舞台に恵まれていると書いていたが、同感である。今もそうなのだろうか。

そんな訳で、絵のような思い出が次々に去来する函館であり、願わくば、永遠に繁栄を続けて欲しい。それは、何処に

いようと故郷を慕う者の心からの願いである。

ただ函館に在住し、こよなく故郷を愛している旧友達の話では、いま最大の心配は、若い世代が流出して、或種の空洞化現象を招いていることにある由。無理もない、総合大学はなくカレッジも少ないから、進学率の高い昨今、高校卒業と同時に必然故郷を離れることになる。加えて又、会場には知識産業も学問や芸術を究める舞台や先輩も僅少だから、就職の途も制限される。いささか悲しい輪廻であり、難しい課題である。

然し、この悪循環を絶ちきるには、何とかして、折角道南に生まれついた若い世代に、物心両面の魅力ある環境を提供し、少しずつでも知性と活性ある街を作り出してゆく以外に途がないのではなからうか。要するに文化と文明のレベルを高めることが端的で最も効率的な対応策に思われる。いいかえると、折角の天与の恵みだが、自然の美や温泉や漁業海産などに安易に甘えるだけでなく、ハイテク工業と文化学術の都市を目指すのが、大きな筋道だろうと愚考する。今、関東の筑波と関西の京阪奈の計画が取沙汰されているが、北海道にも一つぐらいそんな街があってもいい筈だ。

兎に角今は人材確保が先決のようだ。そしてそのためには、重ねて言えば、ハード、ソフト両面での内容と吸引力のある都市づくりが至上課題である。もとより市民が力を合せ日夜そのために努力を傾けておられるのは重々承知だが、岡目八目ということもある。以下は、いささか遠くについて故郷を見守っている一函館生

れの、無責任な夢物語である。誠に僭越だが、戯れに思いついた絵空事を書き並べるので気楽に読み流して頂きたい。ひょっとすると、そんな勝手な夢や空言も、真に大きな知恵を引出す「呼び水」になるかも知れず、それをひたすら願うからのことである。

差当たってはハード面、詰り都市計画の将来をテーマとして、いくつもの夢物語りを披露させて頂くことにする。

第一は、函館港のゆきつきる辺り、即ち連絡船が着岸していた棧橋付近と、その東側の海浜、大森浜との間は1〜2kmしかない筈、そこでこの両岸を結び双方の海水を流通させてはどうか、との着想である。つまり、巴の港と大森海岸との間に運河でも通じて、東西の海洋を繋ぎ合せようというのが愚見の骨子である。

恐らくこれによって、函館湾の閉鎖海域の海水が格段に浄化されると共に、中小の船舶の運河の往来を通じて、人も富も文化も行き交い、道南全体の活動が広域化するのではないだろうか。当然函館湾に面する各地と、いわゆる下海岸地帯とが近くなる。

若しこの着想で、少くも開溝式が無理なら、海底部を大径の管かトンネルで結んでもよい。兎も角、両海域を繋げると夫々の水質や水温や気象や、そして漁獲と海産物等が、どんな影響をうけ変化するか、各種の条件を設定してシミュレーションを行ったうえで、その結論を丁寧に見届けたいものである。

第二の夢物語りも極めて架空的な都市改造の私案である。

その骨子は、昔隆盛を誇った函館ドック

クの辺り、弁天町の先端と、その北の対岸、例えば上磯とか渡島当別とかの間に大架橋の建設を構想することにある。若し世論が命ずるなら、その中間に人工島を造成して、第一汽港やらヨットハーバーやらを建設しても面白い。技術的には本四橋や東京湾横断道や関西新空港の経験も生きているので、それ程架空なことでもなからう。

更に面白いのは、この架橋と同時に函館港を囲むようにして高速道路を巡らし、環状湾岸道路により都市の骨格を構築する計画である。そうするときつと、その周囲に活気あるビジネス街とハイテクの工場街ができ、更にその外郭を住宅がとり巻くことにならう。これの行きつく所、中心部に海上公園を見据えながら、環境絶佳の環状都市が誕生することになる。同時にその環状線から縦横に高速道を敷けば、やがては必ず誕生するであろう新幹線とその新駅とも補完し合って、素晴らしい道南交通網が出来るに違いない。

第三の夢も、更に大風呂敷なインフラの新構想だが、これについては、何人かの先輩、友人と語り合ったことがある。函館と似た運命の室蘭地区と道南を結びつけ、広域的なサイエンスパークのような計画を展開できないかとの試案である。仄聞する所、函館から奥地へ北上する高速幹線については、計画が練られている由、誠に結構だが、それだけだと直線距離では至近にある室蘭へ行くにも長万部を経由せねばならず、結構遠い。然し地図を見れば誰でも気づくことだが、森町の東海岸砂崎あたりと室蘭の岬の先端を海底ないし海中トンネルで、噴火湾を

横断して結べば、恐らく函館・室蘭間は一時間以内で到着できるに違いない。そうすれば両市を含めた広域の道南産業圏、或は今脚光の所謂サイエンスパークの形成が期待できる。

室蘭にも、尚捨て難い魅力が温存されている。一つは、新日鉄や日本製鋼が育てた重厚長大の大工業力とその掘野産業であり、いま一つは、室蘭工業大学を中心とするハイテクの萌芽とそのインキュベーションである。双方とも標記サイエンスパークの主要メンバーとして期待できること論を待たまい。

翻って考えると、日本の政治、経済、文化のどの面でも、すべて弊害の原点は、東京の一点集中にある。然しこの状態を続けてよい筈はなく、曲折はあろうが、今後は知価と地価が相伴って四方に拡がり、所謂地方の時代に移ること必定であろう。アメリカの指摘を待つ迄もなく、日本は何か構造的に狂っている。先ずは内需、それも狭くて不備な国土のインフラに資金を投入するのが全てに先決するのではないか。特にこれまで放置され続けた北海道、それも比較的資産価値の残存する道南に先ず目を向けるよう提唱するのも一案ではないか。要すれば、同志でそんな叫び声をあげたり、構想を廻らしたりするのも、あなたがち私達函館生れの我田引水ばかりとは言いい切れまい。私もそんな思いを折々繰り返しては、時に切歯扼腕し、時に胸を膨らませたりしている昨今である。



函館山と五稜郭跡を表現

新校舎建築始まる

Ⅱ 本年度着工・平成5年度完成予定 Ⅱ

現校舎は、昭和31年9月竣工以来30余年を過ぎ、老朽化が激しく、改築が毎年の懸案となっていたが、本年度着工が正式に決定し、すでに5月下旬から工事が開始された。

工事は、4期に分けて行なわれ、平成5年度完成予定である。これにより、平成7年の開校百周年は新校舎で迎えることになる。完成が待遠しいことである。建物は、鉄筋コンクリート4階建、総事業費約29億7千万円の予定である。

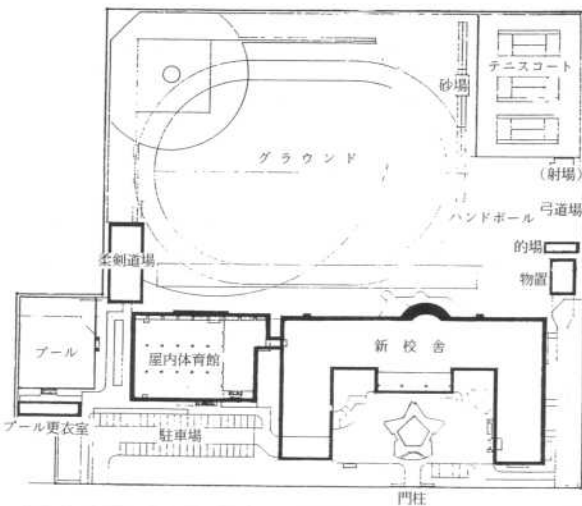
新校舎の主なあらまし

- 校舎の外観および外部設備
- 1 外観は、北海道の玄関としての函館を表現して、「函館山」のイメージを4階建とし、階段状にセットバックした。
- 2 生徒玄関は、「函館の文化と歴史を表現するため、「函館公会堂」の玄関のような感じを出す。
- 3 学校のシンボルである白楊は、可能な限り生かして緑を確保し、校舎の隅柱を円柱として、「白楊の幹」を模したものにす。
- 4 前庭の中央部には、カラー敷石により、特別史跡の五稜郭跡を表現する。

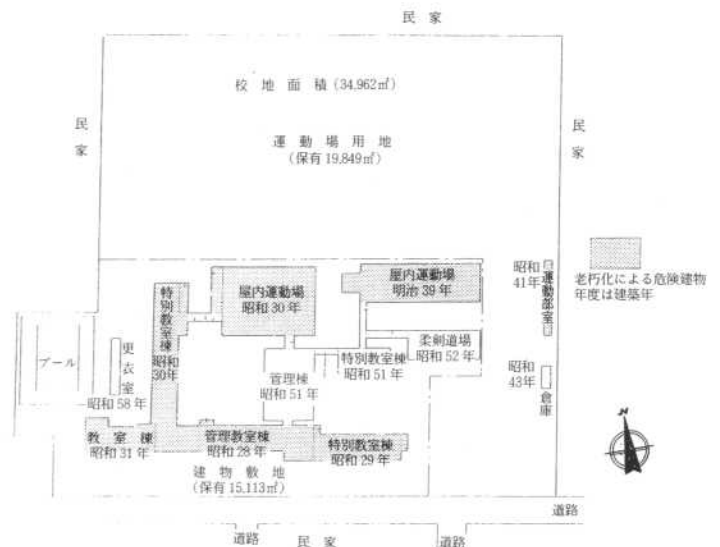
- 5 校舎を集約し、極力グラウンドを広くし、トラック、野球場、サッカーコート、ハンドボールコート、テニスコート、弓道場を取れるようにする。
- 6 グラウンドの砂は、グリーンコート（比重の重い砂）を敷き、砂ほこりを防ぐ。
- 7 屋上に天体ドームを設ける。
- 校舎の内部設備
- 1 暖かさ、柔らかさを持たせるため、木材（地場素材）の活用をする。
- 2 普通教室は学年ごとに1フロアとする。
- 3 多目的生徒ホールを設け、2階まで吹き抜けとし、文化活動、講堂等にも利用できるようにする。気持ちの和らぐ雰囲気作りのため、ホールには、テーブル、ソファを置き、壁面にはレリーフも設ける。
- 4 各階に、生徒の出会いの場、語り合いの場として生徒広場を設ける。
- 5 廊下の壁面やコーナーには、絵画、彫刻、生花等の展示場所を設ける。本校は、歴史も古く伝統もあり、後世に本校の歴史を伝えるため、資料保存室を設ける。
- 6 貴重な図書が多数あるので、図書室用の書庫を設ける。



新校舎 外観パース



新校舎配置図



現校舎配置図

白楊ヶ丘同窓会東京支部 第十三回親睦大会

65期 菅原 大作

平成時代に入って最初の白楊ヶ丘同窓会東京支部の「第十三回親睦大会」は、平成元年十月二十五日(水)午後四時三十分から、東京・港区南青山の「東京青山会館」で、来賓及び同窓生約二百三十人が出席して行われた。

今回の親睦大会では、特別企画として、函中の同窓生(51期)で元総理大臣・田中角栄氏の筆頭秘書を二十三年間勤め、最近では政治評論家として、テレビ出演や講演会、週刊誌など、多方面の活躍をしている早坂茂三氏に、参議院の保革逆転現象など混迷が続く政局が、今後どのように展開して行くかに焦点を絞って「終りの始まり(素人時代の幕開け)」と題して、懇親会の前の一時間、講演をしていただいた。

講演の中で、早坂氏は、長年政治活動を共にした田中角栄氏の魅力について、「演説がうまく、聴衆をとらえる迫力があつた。例えば、田舎の小さな会合などでも一人ひとりの生活状況をきっちり把握してそれぞれの人に「元気でやっているか?」と話しかけ、また子弟の就職なども実に細かく面倒を見た。さらに、ブレンとしての若い官僚を育てることに「も熱心だった」と述べた。また、最近の政治情勢については、「七月に行われた参議院議員選挙で、自民党は大敗し、代わりに野党勢力、ことに社会党が大幅に

伸びた。社会党は、土井委員長の人気によるところが大きいが、自民党が負けた原因は、選挙公約でやらないといっていた消費税を強引に導入し、その混乱の真っ直中での選挙であつたからに他ならない。野党側は、この選挙結果を受けて、衆議院を早期に解散し、選挙を行って、政権を取ろうと考えている。しかし、自民党側は、負ける選挙をやるわけがなく、現在は選挙を何時実施するかを眺めている段階だ」と話された。また、昔に比べ、政治家として本当に実力のある人が少なくなり、いわば素人が政治に関与してきている情勢を踏まえ、「最近、社会党が政権に大きく近づいたとして話題になっている。しかし、自民党が公約違反とか、強引な政策を押し進めているとかの批判はあるが、政治に対する勉強を自民党がもっともよくやっている。これに対し、野党各党は、自民党から出された政策に対して反対はするものの、それに代わる代案を示すことができない。保革伯仲といわれているが、それはあくまでも議席数の問題で、いわゆる政治のプロ意識については野党側にはまだ問題が多い。しかし、自民党にしても議席数の多さにあぐらをかいている状況に変わりはなく政策面で国民に訴える方向に行かなければならない」と、時にユーモアを交え、独特の語り口で聴衆を魅了した。講演会場には、実行委員の予想を上回る約百二十人が出席、立ち見も出る程の人気であつた。

早坂氏の講演後、会場を変えて六時三十分から大会と懇親会に入った。大会は、第69期・高木隆氏、第75期・桑原洋子さんの司会のもとに始められ、最初に第62期・荒井浩氏が開会を宣言。次いで出席者全員で同窓会歌(函館中学校校歌「玄冥の北の一道……」)を合唱した。

この後、支部長の第48期・篠田作衛氏が、「支部長となって初めての大会でもあり、なにかと至らない点が多々あると思われる。しかし、伝統ある大会で同窓生が一堂に会し、母校の動向を聞き、母校の一層の発展を願う気持ちを全員が持っているものと思う。今後とも母校の一層の充実と東京支部の一層の発展を期したい」と述べた。次いで、来賓として出席した大澤昭夫函館中部高等学校長が母校の近況について「現在の校舎は、昭和二十七年から五十四年にかけて増改築が行われてきたが、全体的に老朽化している。このため、全面的な改築計画を関係各方

面に働き掛けしている。平成六年には、創立百周年を迎えるが、それまでには、新校舎が完成するものと思う」と述べた。この後、同じく来賓として出席した高市道也函館市東京事務所長、佐藤弘明同副所長、柴田隆一白楊ヶ丘同窓会事務局長、三浦祐晶同札幌支部長、植木正二郎同宮城県支部長をそれぞれ紹介。この中から柴田事務所長と三浦札幌支部長、植木宮城県支部長に祝辞をいただいた。さらに、東京支部の副支部長に新たに就任した井筒吉彦(43期)、三國比左男(51期)、高橋良一(52期)、荒井浩(62期)の各氏を紹介して大会セレモニーを終了、親睦会に移った。

会場内には、例年と同様に、函館市東京事務所から寄贈を受けた函館山からの夜景や函館港周辺の景観などをデザインした観光ポスターが多数貼られて、雰囲気盛り上げた他、函館近郊の七飯町で作られた「函館ワイン」(函館市寄贈)などもあつて、会場内は懐かしい函館弁であふれていた。宴が最高に盛り上がった頃、ここ数年の恒例となっている同窓生からの寄贈品による抽選会に移ったが、今回も、寄贈品として洋酒やテレホンカード、書籍、雑貨など、約二百点近くが寄せられ、ビンゴゲームによる抽選が行われた。会場内では、「ビンゴ」となった時の大きな歓声が随所に上がると同時に希望の賞品を当てて喜びあっている姿などあちこちに見られた。

そして、抽選会の終了後、函館中部高等学校校歌「火柱のはためく峰も……」を全員で合唱。次回の再会を約して、午後九時過ぎ、終了、散会した。



片目片腕の怪剣士

「丹下左膳」は我が函中生まれであった!!

60期 北原 耕太郎

片目片腕のニヒルな異形剣士「丹下左膳」と言えば、ある年令の方なら知らない人はいないほど有名な時代小説である。私も小学生の時「こけ猿の壺」の漫画を見つけて、胸を躍らせて読んだ。

この丹下左膳は、昭和4年(一九二九)日活で伊東大輔監督、大河内伝次郎主演で映画化され、あの「姓は丹下、名は左膳」のセリフで大ヒット、一躍有名になった。

さて、この原作者が「林不忘(はやしふぼう)」であることは意外に知られていない。そして、この林不忘は、長谷川海太郎が本名であり、なおかつ我が函中の大先輩であることは、より知られていないのではなからうか。私もある先輩から聞かされてびっくりしたのである。

そこで、知られざる(?)大先輩長谷川海太郎を紹介したいと本文を書いたしだいである。海太郎の紹介は、昭和60年3月8日の北海道新聞夕刊に、また同年2月か3月頃の発行と思われるPTA会報28号で、第22代校長寺岡二郎先生と、出版社晶文社中村勝哉社長(52期)が、それぞれ一文を書いておられる。

現在でも、しばしば登場する「丹下左膳」を簡単に紹介してみよう。三部からなるシリーズで、第一部新版大岡政談(小説中で争奪的になる名刀の名をとっ

て乾雲坤竜の巻と呼ばれることもある)、第二部こけ猿の巻、第三部日光の巻となっている。

第一部は、当初南町奉行の新版大岡政談として発売したが、丹下左膳が有名になり、だんだん左膳が話の中心に出てくるようになる。

され、船板をいかに組んで遠く漂い去るのである。

第二部こけ猿の巻。「チョビ安」という子供のキャラクターのためか、現在でも一番登場する。たまたま何の因縁か、この原稿を書いている8月16日夜8時から10チャンネルで、藤田まことの左膳で放映された。

ストーリーは、秋月藩が老中と悪徳材木商人の奸計により、殿様切腹、お家取りつぶしとなる。その悪事証拠書類を家宝「こけ猿の壺」に塗りこめる。その壺を持って逃げる家臣とその子「チョビ安」。善悪入り乱れての争奪戦。ひよんなこと



アメリカ放浪時代の長谷川海太郎

丹下左膳は、奥州中村藩46万石相馬大膳の家臣で、主君の命により浪人となり、名刀乾雲坤竜の二刀を手に入れるため江戸にきている。この乾坤二刀は、離ればなれになると、必ず血で血を洗う騒ぎを呼びおこす。名刀の争奪が小説のストーリーである。結末は、左膳が持っていた一本を、大岡越前の助力のもとに取り戻

で左膳が、父を殺されたチョビ安を守ってやることになる。結末は、大岡越前の探索もあり、勸善懲悪めでたしめでたし。第三部は省略させていただきます。

ペンネームは三つ 一人三役

年収は十億円(?)

長谷川海太郎は、ペンネーム三つ、谷

譲次、林不忘、牧逸馬を使い分け、それぞれが名をなした昭和初期の大流行作家である。作家としての収入は、当時の一番であったらうと言われ、昭和11年版朝日年鑑によると当時の収入は87万7千円。現在価値に換算すれば、10億円で近いものとなる。赤川次郎かたなしである。三つのペンネームは、小説の種類で使われていた。

谷譲次は、海太郎のアメリカ体験を基に書かれた「脱走」「テキサス無宿」「めりけんじゃっぶ商売往来」等めりけんじゃっぶ物のペンネーム。

林不忘は、「釘拔藤吉捕物覚書」「丹下左膳」等の時代小説のペンネーム。

牧逸馬は、ヨーロッパ体験を基にした「明日の蜃気楼」等家庭恋愛小説、怪奇小説のペンネーム。

海太郎の生まれと生い立ち

父は長谷川清、別名淑夫(よしお)、号は「楽天」「世民」と称した。佐渡相川の金座役人の家に生まれる。長じて東京帝大に入学(卒業はしていない)。佐渡へ戻り佐渡中学の教師となる。この時の生徒に、二・二六事件の理論的指導者とされ、処刑された北一輝がいた。明治32年にユキと結婚。

明治33年(一九〇〇)1月16日長男海太郎が生まれる。

そして、明治35年(一九〇二)に一家で函館に移り、元町に住む。爾後、長谷川家と函館は縁ができることになる。父は、北海新聞、次いで函館新聞の主筆をつとめる。五人兄弟で、弟の濬一郎、濬二郎、妹の玉枝である。

小学校は弥生小学校に通い、小学生の頃は無口で目立たない子供だった。

函館中学とストライキ

函館中学に進んだ頃から、文学に興味を持ち始め、徳富蘆花の「順礼紀行」、啄木に熱中する。中学4年の頃から身体もぐんぐん大きくなり（身長一八〇cm）、腕力もできて、教師の立場から見れば、乱暴者のケンカ好きに映った。

中学5年のときは、野球部応援団長になり、弁論部のリーダーにもなる。対函商戦応援に端を発したストライキを指揮し、榎本武揚よろしく五稜郭に11日間立籠もる。先輩の仲介により、退学処分者を出さないことを条件に籠城を解いた。卒業試験が終了後、卒業者名簿に海太郎の名前がない。結局は敗北だったのだ。落第よりも退学をとり、上京、大正6年17才のときである。そして中学卒業でなければ入学できない明治大学専門部法科（3年制）へ、なぜか入学した。しかし、「落第」という最初の失敗は、長く大きいショックであった。

在学中、大正12年に憲兵隊に虐殺されたアナーキスト大杉栄の家へ出入りしていた。海太郎は、権力的官僚的人間に反感をもっていたので、大杉への共感となり、ある面で影響も受けたのではないかと思われる。

海太郎のアメリカへの留学と生活

大正9年3月明治大学卒業後、一時帰函し、アメリカ行きの準備を進める。横浜から出港し、大正9年（一九二〇）9月からオハイオ州オベリン大学へ入学す

る。ところが、オベリン大学の記録によると、同年11月16日に「英語力不足につき」退学届が出されて2ヶ月の在籍に終り、成績評価はないとなっている。日米格差によるカルチャーショックと、勉強したはずの英語が全滅分らないことのショックが大きかったのではなからうか。オベリン大学「脱走」後、同州クリーブランドへ行き、日本人風来坊の溜り場へ飛び込む。ここは、谷譲次言うところの西部の「確立排他的日本社会」のドロップアウトであった。後に、海太郎はこれを「めりけんじゃっぷ」と命名する。そしてこの脱走が「谷譲次」の出発点でもあった。

以後、大正13年（一九二四）までの4年間アメリカ各地を転々とし、経験した仕事も、それに従い皿洗いや歯医者助手、山火事専門の消防夫等々種々雑多にわたっている。

しかしながら、大都市のデトロイト、シカゴ、ニューヨークと転々とする間、大工業都市に向かって発展中のエネルギー、そして一九二〇年代の渦巻くアメリカ文化、即ち、ジャズ、映画、ラジオ、自動車等、今我々が文化として享受しているものが、急速に普及し始めた時代を大いに吸収していったのである。

大正12年秋、無性に帰国したくなり、船でアメリカを出ようとニューヨークへ行く。しかし、船乗りの仕事はなかなか見つからず、12月になってようやくイギリスに行く貨物船の石炭夫の仕事があり乗船、オーストラリア、中国、韓国を経由して、大正13年（一九二四）帰国した。

帰国後の足跡と活躍

帰国は一時的のつもりであったが、アメリカで排日移民法が制定され、ビザがおりなくなってしまう。不本意ながらの日本での生活が始まる。

そこから海太郎は何やら書き始めた。そのうち、松本泰が主宰する雑誌「探偵文芸」を手伝うようになり、また、雑誌「新青年」の森下雨村とも知り合い、大正14年から同誌に載るようになる。次いで時事新報にも載るようになる。これが「めりけんじゃっぷ物」と言われ、



(S. 60. 3. 8. 北海道新聞)

当時としては独特の話し言葉で、アメリカで生活する日本の風来坊を強くカッコ良く描いているのである。

同じ大正13年に、「釘抜藤吉捕物覚書」により「林不忘」の活躍も始まる。四年間離れていた日本の江戸情緒の理解と表現に苦労しながら、釘抜藤吉は完成していく。これを土台にした「丹下左膳」が、昭和2年（一九二七）10月から東京日々新聞に連載される。

三田村篤魚は、特に時代考証の面から、この「丹下左膳」、白井喬二の「富士に立つ影」、佐々木味津三の「旗本退屈男」

という現在もお人気があり、映画、テレビ、本に登場している時代小説を徹底的にやっつけたのである。

それにも拘らず、このいいかげんな「丹下左膳」の人気は増すばかり。

昭和3年3月海太郎夫妻は、中央公論の特派員としてヨーロッパの旅に出発したが、シベリア鉄道の車中でも書き続け、その原稿をモスクワから東京へ送って、連載は同年5月に終わったのである。終る前から、芝居になり、映画になり、ラジオドラマになった。

海太郎の恋愛と結婚

海太郎は、アメリカでも帰国後も、それなりの女性関係はあったと見られる。

松本泰によれば、帰国翌年の大正14年の初夏に神経衰弱気味になったという。4年間島国から離れたアメリカ体験の後で、すぐに日本に同化できず、違和感を感じていたこと、体調も悪かった（ぜんそく？）ことも重なったことなどもあろう。

海太郎は、松本泰に厚木の七沢温泉玉川館へ行くことをすすめられ、原稿執筆を兼ねて7月に出かけた。気に入ったのか10日ほどの予定が、1ヶ月も帰ってこない。松本夫妻も玉川館へ行く予定だったが、忙しく予定が取れないため、松本夫人の同窓生の香取和子が、8月になって松本の紹介状を持って七沢温泉へ出かけて行った。

香取和子は29才の独身、青山女学院英文専門科を卒業し、松本家で翻訳をしていた。できれば結婚しないで翻訳家として身を立たいと願っている女性

であった。

これが、2人の出会いであった。

さて、彼女は安着のハガキを1回松本家に寄越しただけで、そのまま消息をたっ
てしまった。

2人は、七沢温泉玉川館で恋に落ちたのである。それがどんな恋愛だったかは、和子未亡人が海太郎没後約60年間大事に持っていた約50通のラブレターでわかる。どれも大正14年10月に書かれたものである。

別れた瞬間にすぐ会いたくなる。早く一しょに起居するようになりたい。天地の間に望みというのはこの一つ。

俺一人の手で世話して、このからだであつたて寝かしてやりたい。

彼は、恋愛から生まれる結婚以前の肉
体関係をごく自然なものとして考えていた。それは、大正14年当時は、当り前の考え方というわけではなかった。

結局、大正15年1月に2人は結婚する。海太郎25才、和子29才であった。

和子夫人は、海太郎が悩んでいた日本への同化していくメディアとなるのである。そして、彼女は、海太郎に意味と方向を与えてくれ、海太郎は彼女により自分が変わったことを強調している。

海太郎のその後の活躍

彼女と恋愛の後に、海太郎の文筆は高まるのである。

谷譲次の「めりけんじゃぶ」物は、海太郎の「神経衰弱」と「恋愛」の中で

書かれ、それから後は書かれることはなかった。そして「海太郎の勝手に作り出した日本」と「実際の日本」のずれから生まれたものが「丹下左膳」であり、牧逸馬の家庭小説であった。

また「踊る地平線」とは、ヨーロッパ旅行の先々で中央公論に送った報告記事のタイトルである。谷譲次の文章よりせつばつまった勢い、即興的エネルギーに欠けている。

牧逸馬が脚光をあびるのはヨーロッパ旅行から帰った後である。ヨーロッパから持帰った資料を基に中央公論で世界怪奇実話シリーズを書き、昭和5年に東京日々新聞で「この太陽」の連載が始まる。その後、続々と家庭恋愛小説が書かれ、大衆小説作家として人気は決定的なものとなった。これらの小説は、多くは上流階級のもので読者の現実から遠く離れていた。その離れ方が魅力だったのだ。

しかし、当時一番人気のあったものが、今は一番面白くない。牧逸馬のものは、谷譲次のものが60年たった今でも新鮮なのに比べ、時間の経過により無残にも風化してしまっている。

また、谷譲次は、戯曲「安重根」を書いている。韓国人安重根は、明治42年元総理大臣伊藤博文（前年まで韓国統監）を満州ハルビン駅においてピストルで射殺し、翌43年3月死刑を執行された。安重根は、深い魅力のある人であつたらしく、獄中で多くの日本人に書を求められ書き残している。当然、安重根は韓国では尊敬を集めている。

政治的な意味あいもあるのだろうか、この戯曲は一度も上演されていないらしい。

また、安重根を題材にした作品は、以来谷譲次以外に出ていない。

新しい家と海太郎の死

その頃、海太郎は鎌倉に豪邸を建築した。昭和10年の雑誌「主婦の友」によると、敷地は一千坪、3階建ての純日本風数寄屋建築で、延べ坪二百坪であった。内部は、電気冷蔵庫、ボイラー室、地下ホームバーなどを備えていた。これらは、当時は超近代設備であった。

ところが、その新築の家がまだ一部工事中であった昭和10年（一九三五）6月29日午前10時、和子夫人が起しに行くと、夜具から身を起しかけ「うーん」と言って崩れた。死亡診断書は、脳溢血とあつた。

こうして、一人で三つのペンネームを駆使し大活躍した、そして小説を地地いた快男子長谷川海太郎は、35才の若さで文字通り波乱の生涯を閉じた。

丹下左膳ほど有名でない生みの親の我が函中の大先輩長谷川海太郎を、同窓生の皆さんの脳裡に留めていただければ幸いである。

海太郎の墓は、鎌倉の妙本寺にある。戒名は、慧照院不忘日海居士と刻まれている。私は、この戒名を読んで、海太郎に合った良い戒名だと思った。今年が生誕90年にあたる。

（文中敬称略）

◎本文の出版について

晶文社刊 室謙二著

踊る地平線 めりけんじゃぶ長谷川海太郎伝

平成元年度東京支部会計決算書

収入の部		支出の部	
前年度繰越	1,307,502	総会費	1,366,303
年会費 (220名)	1,540,000	報刷費	574,283
年会費 (822名)	1,644,000	事務費	198,731
利息	12,841	会議費	284,701
雑収入	70,000	繰越	89,580
計	4,574,343	年度繰越	2,060,745
		計	4,574,343

同社社長中村勝哉先輩（52期）のご好意により、全面的に資料として使用させていただきます。中村先輩に厚くお礼申し上げます。
同書は、二九五頁あります。とてもこの小文ではまとめ切れません。函館出身者にとって興味のつきない海太郎、一読をおすすめいたします。
なお、海太郎の弟「長谷川四郎氏」はやはり函中出身（29期）詩人、作家として著名で、晶文社刊「長谷川四郎作品集」全4巻が、昭和44年に毎日出版文化賞を受賞した。次の機会に紹介できればと考えている。

各期だより



◎第34期（昭和7年卒）

平成二年五月三十日、三十一日の二日間首都圏在住の同期生の親睦会が来住野広明氏の世話により開催された。

場所は熱海市に隣接した湯河原温泉の万葉荘、参加人員十名。一泊でしたが、大いに飲んで、歌って、踊りまくり、七十七才の喜寿をむかえた老人とは思えぬ愉快な会合でした。

おまけに会費が安いことに驚きました。

一泊二食、お酒をたら腹のんで八千五百円でした。この宿舎はむかしの湯治場であつたのですが、今では十階建の立派なホテルです。その代わり予約は二ヶ月前にしておかなければ、仲々泊れないとのことでした。念の為。

参加者は来住野、鈴木、五十嵐、大野、大原、徳田、三上、伏見の各氏でした。

（伏見滋夫記）

◎第35期（函八会）

昭和8年卒業同窓会（函八会）は、今年5月16日から18日まで花博を兼ねて、関西方面に詳しい神戸在住の加藤君の綿

密なスケジュールによって、琵琶湖北岸の歴史の跡を廻り、その夜、三菱化成寮で宿泊、出席者10名による宴会に入り、往時に返り青春の昔を語り合い、各自自慢の喉を聞かせ合い、琵琶湖の水も大分波立った事であらう。

翌日は湖北地方の旧跡を尋ね、県宮醒ヶ井養鱒場を見学、醒ヶ井楼別館での鱒料理に舌鼓を打ち、二泊目は奈良県生駒山の聖天様のお膝元に泊まり、翌朝は朝の動行に参加し、清冷の気を十分に吸わせていただいた。（同寺は、同期生新田君執事長）

その後花博会場に向い、各国各所の庭園、百花繚乱の花園を巡り、各パビリオンに列を作る中、加藤君の計らいで、三菱館の壮大な全大型パノラマ映像に驚嘆して場外に出た次第。

その場で、午後5時過ぎ散会した。また、京都から橋本君、生駒山の新田君、小生はいつもの通り新潟から参加、お互いに元気の再会を約して。

（佐々木孝允記）

◎第39期（昭和12年卒）

在京（東京・横浜・川崎等）39期生は、今年古稀を迎えて一つの節目にあたり集まることになった。

当日（5月11日）の会場新橋の第一ホテルのロビーで世話役の前田と畠山は、昭和12年の函中卒業アルバムを広げて、出席者の若き日の写真から今日の想像をしていた。

何年も或いは何十年も会っていないなかったので、最初は誰だかわからなかったのが、会って話をしていくうちに、昔の面影が少しずつ浮かんでくるのは、不思議

であった。

思い出は遠く、訓練訓練に明け暮れた昭和天皇の御親閲式、雪の日の寒稽古、きつかったマラソン大会、風に鳴る亭々たるポプラ並木等、中学の思い出に始まり、戦中戦後の忘れ得ぬ思い出の数々が走馬灯の如く、脳裏を駆け巡った。

出席者は、安味、河村、関口、前田眞早人、山口の各氏に世話役2名を入れて7名だったが、大正・昭和・平成の三代を今日までとにかくよくぞ生きて来たものだという実感を、お互いに確かめ合い、再会を約して散会した。

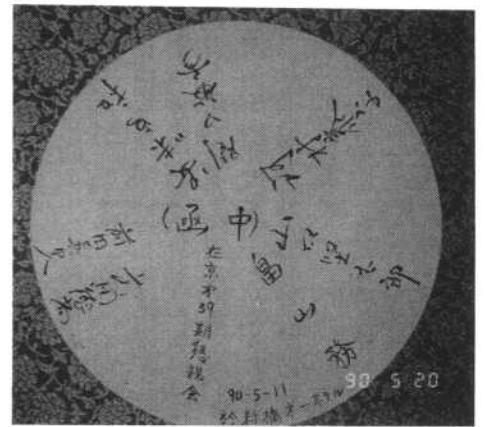
三代を生きて矍鑠古稀の春

（前田徳尚・畠山務記）

◎第40期（よんまる会）

わが同期会は毎年函館、札幌、東京と回り持ちで全国大会を開催しています。昨年は東京が当番で、静岡県清水市で開催し、東京支部所属の会員二十五名を含む三十五名が出席して盛会でした。

今年「古希」記念大会を二泊三日で、旭川―温根湯―摩周湖―知床―釧路を周



遊する道東めぐりを実施しました。しかし、寄る年波のせいで、出席者は二十名ならずでした。その欠席の理由は病氣療養中と体の不調のためが圧倒的に多く、古希の不面目躍如たるものがあります。

卒業生二五〇名中、戦争と激動の戦後の生活を闘いぬいた現存者一三〇名、全員揃って元気に二十一世紀を迎え、さらなる飛躍を心から祈念したいものです。

（相馬正樹記）

◎第41期（玄冥会）

我々函中卒四十一期の在京同期会は昭和四十八年以来「玄冥会」として、毎年平均二回の割合で、而かも会場はその関係者が在職していたので、自動的に数寄屋橋ニュー・トーキョーを利用して開催している。

会合は発会以来二十五回、平均の出席者数は十六・七名と、この種の会合としては手頃の集まりといえるし、七十才になんなんとするが、昭和九年入学昭和十四年卒業の五年間と、その後の学校生活と軍隊生活の太平洋戦争の真只中を通り抜けた共通の意識が、会合の度に新しく蘇り、会合は常に談論風発尽きる処を知らざる状況である。

然し、会員の中にはこの十七年の間に病魔に倒れた者も、又現在療養中の者もあり、高齢者社会とはいえ次第に健康であることの悦びの割合が高まっている世代となった。北海道方面からの移住もあり、会員数は三十九名だが十名程は健康上参加出来ぬ状況で、残余の者が夫々「玄冥会」を楽しみにしている。

（堤明司記）

◎第43期（昭和16年卒）

四十三期は、幹事が二年毎に必ず交替することになっている。幹事を一度やれば同期会に対する関心が強まり、退任した後も会の行事に積極的に協力するといふ効果を狙ったものだが、今では幹事経験者が延べ二十四名になり、所期の効果は充分あがり、団結は強く、毎回の出席数も二十名以上となっている。

ことし春、交替した新幹事による同期会が六月八日、新宿小田急別館ハルクの八階「豪華」で開催された。昨年北大から神奈川大学に移った有馬純吉君が初めて出席し、相変わらず理知的な風貌を見せてくれた。

四十三期生は現在六十六〜七歳で、ほとんどが第二の人生を送っているのであるが、酒席での話は函中生であった青春時代のこと、戦地の経験談などで、いまの年齢を忘れさせるものばかりであり、だから同期会は楽しいのであろう。

来年は、函中卒業五〇周年に当たり、全国から地元函館に集まって、合同同期会を開催することが決まっている。

聞くところによれば、在函の仲間達は既にその合同同期会の時期、場所、イベントなどについて話し合いを始めているとのことである。

まだ一年以上先のことであるが、健康を損ねることなく気をつけて、必ず出席するよう胸をときめかせている昨今である。

◎第45期（昭和18年卒）

45期卒業の「翠楊会」は、二年振りて東京在住の29名が集まって「東京翠楊会」

（井筒吉彦記）

を去る3月24日銀座「高松」レストランで開催した。

開会に先立ち、昨年亡くなられた順天堂医大教授杉浦光雄君のご冥福を祈って黙祷を捧げた。

開会後は、近況報告やら、学生時代の話で大盛会であった。

幹事 池田和行、田沢修二、大楠淳、松木政司

（松木政司記）

◎第47期（昭和14年卒）

名簿を整理して集計してみたら、関東地区に同期生（一部関西を含む）が44名もいることがわかりました。

平成元年に、自然発生的に、支部総会とは別にニュートーカーに参集を呼びかけ、卒業後の懐かしい顔を見合っただけだが（小生は都合で欠席）、その時に、47期のメンバーが4月7日に集まってみようではないかという決議？がなされました。『時任会』なる案もありました。

平成2年度は4月7日（出）と都合よい日にあたって、今回19名の参集をみました。西は尼崎の成田さん、珍しい顔では石川（富田）明芳さん、増田勉さん（兩名開業医）。木村正昭仇名は桃子さんは昔と変らない優しい顔を出してくれました。

磐田からは浅野博さん、等々、そのうち皆さんに連絡します。余りあてにしないで待っていて下さい。

支部総会の出席が悪いので、都合をつけて出席して下さい。皆さんの近況も知りたいと思っていますので……。

（松村豊記）

◎第48期（昭和20年卒）

今年も『同期だより』を投稿する時期

となり、還暦も過ぎると一年の経過の早いのに驚いている次第です。簡条書き、年月順に東楊会（十六年函中入学、二十年函中四修で卒業したものが主として、会員となっている）、白楊会では、48期生の会（関係者の活動・消息・トピックスを紹介することにしました）。

①平成2年3月10日白楊ヶ丘同窓会東京支部長篠田作衛氏が、函中卒業式に出席。

②2年5月7日13時57分、於玉川総合病院で井上明之氏が『ガン性腹膜炎』で逝去されました。喪主井上洋子夫人。

③2年5月26日日本庄登志彦氏、句集『志帆』を角川書店から初出版。

④2年6月11日遠藤守一氏のお嬢さんゆかりさん（国立音楽大学器楽科一九八七年卒業）がクラリネット四重奏団デビュー、演奏会をルーテル市ヶ谷センターで開催、東楊会から武田炯、小野と令嬢2名、橋本寛、浜中夫妻、松木と令嬢、山越剛、四ッ谷夫妻、渡辺函、夫妻14名が鑑賞、有望なグループであるとの評価が高い。

⑤最後に、平成2年の東楊会は5月26日（出）午後5時半から東京銀座の「安員寮」で恩師荒幡、加納両先生の臨席をいただき、会員22名が参集して盛大に行われた。篠田幹事が冒頭の挨拶、旧友井上明之氏の冥福を祈って全員で黙祷を捧げた。生前、明朗闊達で誰よりも元気な病状の悪化、そして逝去は、我々一同に大きな衝撃を与えた。

会は、遠来（神戸）の友、国分元一氏の乾杯で盃を上げ、荒幡、加納両先生

生のスピーチがあった、やはり遠来（宮城県）の中村四郎氏の挨拶や、上河睦美氏の函館の状況についての話があった、次第に盛り上がり、遠く過ぎし少年時代を偲び、これからの生甲斐い、発展の一助となることを願いつつ初夏の宴は終わった。

後日の先生の便り、荒幡義輔先生「私も幸い元氣となり、皆様にお会い出来、健在であることこの幸福な一時が持てました。この分ですと、函館の会にも出席出来るものと楽しみにしています。」

加納俊夫先生、「写真受領。有り難う。東楊会は、愉快でした。」

◎第51期「あずまし会」
（武田好司記）

。総会
2年4月20日番町グリーンパレス参加19名

我等同期生全員が本年度中に還暦に達するので、「還暦祝賀会」と銘打って会合したわけであるが、年度当初で多忙の者が多く、意外と参加者が少なかった。しかし、役員改選等セレモニーの後は、談論風発、時の過ぎるを知らず、全員が二次会に臨み、深夜雨の中を散会した。

なお、出席者および年会費納入者に対し「華甲の賀」の金文字を入れた「デイリーコンサイス外来語辞典」を還暦記念品として贈呈した。

◎第52期（昭和25年卒）
卒業40周年記念大会、6月23日快晴（予報は雨）

今年には札幌の諸兄が世話人となって、



解体の決まった旧体育館で応援歌を斉唱する「函中二〇会」のメンバー

函中時代の体育館に別れ 青春懐かしみ同期会

函中二〇会

解体される旧制函館中学校(現函館中部高)時代の旧体育館に別れを告げようとして、二十日、同中学へ昭和二十年に入學した同期生でつくる「函中二〇会」のメンバーが旧体育館に集まり、かつての校歌を斉唱して青春時代に思いをはせた。

この体育館は明治三十九年(一九〇六年)完工の木造建築で、現在も授業や部活動に活用されているが、老朽化が著しく今夏、高校の校舎全面改築に伴い解体される。

これを聞いた同会メンバーの追分町六、会社役員宝保稔さんが「旧制中学時代の校舎で今に残ったのはこの体育館だけ。壊される前にもう一度訪ねよう」と仲間呼びかけ、十年ぶりの同期会が実現した。

この日は、地元函館を中心に東京、札幌などから五十人が参加。早速、旧体育館へ足を運び「ここだけは昔と全然変わらぬ」「昔はここに一千人以上が集まって朝礼をやったね」と感慨深げに建物を見渡して

いた。続いて旧制中学時代の校歌や応援歌を声高らかに歌い上げたが、懐かしいフレーズに目を熱くする人も。この後、会場を移し、恩師である五稜郭町一八、高嶋小太郎さん(左)、日吉町一、横田忠康さん(右)から十五分ずつ、講話を受けた。同期生はみんな五十歳代後半で、中には町長や市議、高校教諭もいたが、生徒時代に帰って神妙に二人の話聞いていた。

定山溪で全国大会が行なわれた。参加者百二十一名、うち夫人16名、お孫さん1名、恩師6名である。

恩師は、丹治敏衛、加納、岸田、関倉春木、岩沢の6先生である。いまだに独身を謳歌する春木先生、現役でラクビーをやっている岩沢先生は、我々よりも若々しく澆刺としておられた。

宴会は、丹治先生の奥様の日本舞踊から始まり、酒が廻るにつれ、40年前の青春時代に限り遙かなる面影が甦がえる。歓声と談笑が時の流れを忘れるまま、騒然と朝まで続いた。

翌日は、伊藤整、小林多喜二の故郷小樽を散策。「流転40年・不滅の友情」のタイトル

を印刷したテレホンカードを胸に、5年後の函館大会での再会を期し散会した。(福津達男記)

◎第53期(昭和26年卒)

今年の三月頃、在函の同期の世話人から電話で、函中の体育館が夏頃までに解体される予定なので、一度見納めのため集まりたい。本州の方の案内をしてくれと声をかけられた。

五月十二日の土曜日、体育館に集まり、校歌、同窓会歌、応援歌のすべてを歌ったが、その風景については、道新の記事を参照されたい。

高嶋小太郎先生から、函館中学校が新制函館高等学校に改称されたものを、函館中部高校に改めたのは、西高と東高の

P.T.A.(先生と父兄代表)に、函館高校又は函館中央高校の校名を使わないでほしいと昭和二十五年三月の学制改革の時に強請された結果という秘話を伺いました。

「浜岡先生(歴史)の御父君が建てられた体育館の一部を函中のシンボルとして学校の敷地の中に保存しておけば、中部高校の歴史の思い出になるのだが」と、九十一歳の高嶋先生は、めっきり萎えた両足を杖で支えながら、惜別の言葉を残して廊下を去って行かれた。(佐々木順一記)

◎第54期(昭和27年卒)

隅田川の水を切って瀬川丸はひた走る。いなせな若者と下町娘が酒と料理を運ぶ。年一回の同期会はひたすら騒々しい。座つ

たとたん爆発する見境のない騒々しさこそ、わが同期会の特色である。去年は京都。席上去年は東京湾にのり出そうかと冗談を言ったことが契機で実現した。屋形船貸切り同期会である。札幌・函館・京都・大阪・福岡からの参加者を加えて三十二名。なつかしい顔・顔・顔……。

窓を開けると川風が頬をなぶる。水上からの東京のたそがれもなかなかのものである。お台場で陽が落ちた。夕焼けに浮かぶビルのシルエット。それをバックに同期会は、ひたすら騒々しい。

深川へ戻ったら九時。別れ難さが深川のスナックを占拠させた。騒々しさはエンドレスである。また来年。想いを残して帰路につく。女性等の一部は翌日から軽井沢のリゾートライフを満喫したようであった。(佐藤正郎記)

◎第60期(三三三会)

昭和33年卒業なので三三三会である。毎年一回、6月が多いのだが、東京支部同期会を開催している。関東以西に支部はないので、東京支部は東北の一部から九州まで含んでいる。実際、塩釜、宮崎県から駆けつけてくれる。

今年も、正式に三三三会として開催し始めて第10回目を迎えた。幹事長の内藤尚君、紅谷弘一君、松田(旧姓木下)栄美子さん、水沢(旧姓照井)房子さん等幹事の骨折りで、6月16日午後6時から大雅有楽町店において開催された。

このところ、立食パーティー形式が多かったが、じっくりと語り合おうということとで和室での開催とした。

当日は、幹事が受付けて待受ける中、つぎつぎと懐かしい顔が到着、出席は45名に達した。内藤君の挨拶のあと、本日出席の在京恩師吉田信一先生(52期)からも挨拶をいただいた。先生はますますお元氣、毒舌も相変わらずでまことに喜ばしい限りである。

今回の初めての参加は、浅野博、大竹隆一、小松力、才善信吾の4名であった。会場の時間制限により、話もつきないまま、泐々と閉会。だが、毎年のごとく幹事も心得たもので、最初から二次会場が用意済。37名が赤坂の鷺の巣へ。驚いたことに函館から亀井(旧姓吉川)慧子さんが駆けつけていて、大歓迎。

二次会でも語りつきなようであったが、時間も遅くなり、再会を約して幕。三次会へ繰出したのもいたらしい。

◎第62期(函中三五会) (北原耕太郎記)

今年も函館「カネモリホール」で8月12日に卒業30周年同期会開催のハガキを受取りました。

大変残念ながら、ちょうどその時は、小生は日本を離れ、南半球におり出席できません。今、本稿を書いておりますが、3時間後には、成田へ向うことになっております。我が期の頃は、このように忙しい世代にあたるのかも知れません。

毎年秋の東京支部総会には、10人前後の顔ぶれが揃いますが、東京周辺の同期会としての組織化には、まだまだ課題が多いようです。

一昨年は、函館で「三五会」があった時は、小生も参加できました。朝、上野駅を発ち、海峡トンネルをくぐり、夕方

から始まる懇親会に出席。翌日は、同期の方々の好意に助けられ、ゴルフコンペに参加することができ、感謝しております。

小生は、東京支部創立以来、62期の連絡係らしきものを続けてきましたが、このところ多忙で任務不十分となってきました。しばらくは、後任に引継ぎ、側面援助をしたいと思いますので、よろしく願います。

◎第65期(函中三八会) (荒井浩記)

今年の函中三八会は、六月三十日土曜日、午後六時から、ここ数年の定例会場となっている東京・新宿のワシントンホテル内「三十三間堂」で行われた。

この日の会合には、北は青森、盛岡、仙台、湯沢、いわき、南は芦屋など、遠方からの出席者も含めて三十五人(男十四人、女十一人)が出席した。今回、案内状を差し上げたのは、百二十三人。出席はできないが、近況を知らせてきた方々が三十人おり、これら欠席通知のあった人々からのメッセージをまとめて清書し、出席者リストと一緒に印刷してこの日の出席者に配布した。

会では、最初に、今年三月、直腸がんのために亡くなった大島(旧姓・宮岡)礼子さんに全員で黙祷を捧げ、大島さんのご冥福をお祈りした。

続いて、同期生として顔は辛うじて覚えがあるものの、当時の高校生活の中でお互い会話をする機会もなかったと思われる人も多くいるとのことで、出席者全員に自己紹介と簡単な近況報告をお願いした。



昔の面影と現在の顔を比べてみようというところで、コピーが引張りだことになっていた。

しかし、会も半ばになると、出される料理にはほとんど見向きもせず、お互い席を変えて、文化祭や恩師の思い出(悪口?)、部活動、同じクラスだった友達のこと、修学旅行の思い出など、卒業してから既に二十七年がたったが、まるで時空を超えて、全員が高校時代に戻ったような会話が續いていた。

午後九時過ぎ、会場の関係で、終了せざるを得ず、参加者主員の記念撮影を行った後、次回の再会を約束して閉会とした。しかし、一年振りの再会、さらに高校卒業以来始めて会ったということなどもあって、別れがたく、二十数人が別会場を探して二次会を行った。この二次会でも汲めども尽きない話に花が咲いた。そして、午後十一時過ぎ、いよいよ二次会を終了したが、さらに、三次会へ向かうグループなど、例年のことながらいつまでも名残りはつきなかった。

(菅原大作記)



小久保住宅復元正面図

会員短信

年会費払込通知票の「近況・通信欄」でお便りをいただいております。平成元年度分から抜粋させていただきます。(敬称略)

(大15卒渡辺春吉) 東京外語卒業後旧制佐賀高校20年、九州大学に63才の停年まで、福岡大学を経て現在も福岡市内の純真女子短大に勤めています。九大で開かれた英文学会に、去年死去された佐瀬順夫君が大分大学教授として出席されかけたのが、函中卒業生との出合いの最初で最後。同君のすすめで東京支部と28期会に入れてもらいました。(昭8卒藪越甲平) ラジオ体操竹ふみ水泳などして元気で暮しております。今年も夫々異ったグループで3回訪道しました。(昭8卒佐々木孝允) 新潟、ハルピン友好都市、友好の翼に参加、市制百周年記念行事としてのボランティア通訳の一端をとの事で一行に参加致しました。(昭12卒柳沢弘) 昨年7月以来病を得まして、現在伊豆にてリハビリセンターに入院中でございます。今後の事を考え、娘の近くへ居を移しました。どうぞ皆様へ宜しくお伝え下さいませー奥様より(昭12卒川村泰平) 2人の娘がラスベガスで仕事中でもう10年になる。老夫婦で6月から9月まで在米生活をして来ましたが、食料品の安さに吃驚しました。日経新聞など衛星中継のファクス版で、日付変更線の関係で前日の日付で入ります。(昭13卒山本安一) 8月末に体調を崩し、精密検査の結果〇

Kですが、目下自重中。京都野鳥の会で知床、三宅八丈と遊んでいます。(昭14卒安野一雄) 68才で一応健康。関東精器KKの監査役をしております。(昭15卒岩倉誠蔵) 心筋梗塞のあと養生している最中です。(昭15卒太刀川卓爾) 10月7日の東京大会では懐しい皆様のお顔を拝見でき、楽しい一夜を過ごす事ができました。皆様の益々のご健康を祈ります。(昭16卒佐藤忠男) 井筒幹事さんから再度入会のお誘いをいただき、改めて入会させていただきますが、何分名古屋在住の為行事参加が難しいと思っておりますので不悪。(昭16卒黒田博之) 虚血性心臓病のため遠出が不可能な状態です。ご無沙汰の限りで申し訳ありません。(昭17卒荏子直) 御無沙汰ばかりしていて申し訳ありません。年月のたつのは早いもので、すぐ目先に老後の生活が迫っております。(昭18卒大屋敬吉) 昭和天皇の御聖徳を世に伝えるために、註釈を付した「昭和天皇の御製」を謹刊、その普及につとめています。(昭18卒速水昊) 病氣療養中のため出席出来ません。皆様によりしくお伝え下さい。(昭19卒石川善正) 88年末をもって40年余り勤務した日本無線を退社して、現在休養中です。(昭19卒吉田徹) 卒業後45年になりますが、函中卒の先輩には種々お世話になっております。まだ現役で活躍しておりますが、最近は少しぼけました。(昭20卒坂本裕美) 東京白楊日より、懐かしく拝見しました。正式に入会いたしますのでよろしくお願いたします。63年8月第2の職場もリタイヤし、目下毎日が土曜日(月5日程度仕事をもっているため)の暮大しをしております。(昭21卒小林允二)

変遅れ申し訳ありません。60才になったのでのんびりやっています。(昭23卒鈴木広) 7月21日始めて九州函中会を開きました。集うもの7名、意外に多いでしょう。全員福岡です。これ以外にも数名おります。最長老は復員兵士藤原豊治氏。(昭25卒宮俊夫) 最近家内の助けなしでは外出不能となりました。他にも御同様の方がいると思っておりますので、同年会費を明示してください。(昭26卒伊関ユキ子) 年会費一万円納付致します。今迄の未納分も含めてお納め頂ければ幸いです。(昭27卒及能正男) 福岡に単身赴任中です。同学(西南学院大)に村岡伸秋氏あり。僅か2人の支部なり! 91年はモーツァルトの没後二百年です。(54期古川静二郎) 納代鉄代君から連絡を受けました。彼と同期です。昭21入学、昭24新制中部中卒同年中部高入学、昭25学区制により西高へ。(昭28卒新谷俊一) 会費納入については過去1・2回位しか払った覚えがなく、道を修する者として汗顔のいたります。今後よろしくお願い申し上げます。(昭30卒小竹嘉子) いろいろお世話様です。私があり函館中部のよかった思い出を話すもので、長男が旅行に行き、わざわざ学校の前で写真をとって来てくれました。青春時代のよい思い出の中部はよいものです。(昭30卒中島陽子) 白楊日よりいつも懐かしく楽しみに拝見させて頂いております。よく父が「沼沢が」「沼沢が」と喜んで話しておりましたことを思い出します。まだまだお若いのにと大変驚きました。御冥福を心からお祈り致します。(昭31卒池田吉彦) 転校しなければ昭28年卒です。昭28大沢さんにお世話になっております。

現在コスモカルチャー(コスモ証券関連会社) 取締役業務部長。憧れの函中だっただけに、心情的には函中出身です。(昭32卒古川セツ) 表紙の中部高の写真懐かしく拝見しました。まわりが整然として住宅地になり校庭もすっきりしておりますが、まわりに樹木が無いのは淋しいですね。同窓会から募金で樹木の寄付というのはいかがでしょうか?(昭33卒二瓶健治) 白楊日より30年前にタイムスリップの感があります。早坂氏、沼沢氏天下に著名な方々が先輩であったとは不明でありました。同窓会に出席しない故と臆を囁んでおります。(昭33卒上平慶一) 50才とはいえ、我々にはまだ30数年の余生があるはず前向きにチャレンジして行きたいと思っております。50の手習いで中小企業診断士に挑戦中、同業者のご教授をお待ちします。(昭33卒菊池宏美) 関西地区の集会がありましたらお知らせ下さい。(昭40卒庄村恵美子) 卒業後共立薬大入学。結婚後2児の母となり越谷市内に開局して13年になりました。函館にはほとんど帰っておりません。皆様にお会いしたいのですが、薬局と育児におわられて残念ながら出席できません。(昭44卒片岡進) 閑静な住環境を求めて幕張本郷に移り住んで4年。こんなはずではなかったのです。我が家の2階から奮張メッセの姿が一望できます。メッセにお出かけの節はどうぞ一声かけて下さい。(昭47卒岡田康明) 次女がヨチヨチ歩き始めました。このところ月一ゴルフにノッてます。(昭47卒中沢裕) 早いものでNTT研究所での生活も10年となりました。

隅田川は流れていた

34期 大原 孫七

先頃函中同期(第34回)の有志で、浜離宮から水上バスで隅田川を遊んだ。往年のボンボン蒸気しか念頭になかった私は、正に東京のお上りさんだった。乗船するや絶妙のタイミングで幹事役から「ガソリン」が補給されたので、船はスイスイ、我々の気分もウキウキと上流へ滑っていく。

あいにくの小雨も一同意に介さず、仁王門、大堤灯から観音さまへ。その後は、九代目団十郎の「暫」の像を訪ねる、女性の装身具を物色する、雷おこしをもとめるなど思い思いの行動を経た上で、「そろそろ腹も北山」と、神谷バー、並木のやぶそば、麦とろなどを思い出したり、横目で見たりしつつ、駒形の「どぜう屋」へ足を運ぶ。

よくしたもので、どぜうが煮上がる跡を追うかのように人間の方もでき上っていく。カメラを構え、被写体に注文つける人、姐さん方も入れるという人、さまざまだった。メイ作、ケツ作の披露が待たれる。

帰路にたまたま一人になって新仲通りを歩いている間に、気がついたら往年時折立ち寄った店の前だった。鰻の白焼の貼紙をみていたら番頭さんと目があってしまった。

腰をおろして「おかみさんは？」と聞いてみたら、「ああ、おばあちゃんですか。元気ですが、今は私が店の方を切り

盛りしています。」という答え。凡そ三十年前のいわゆる少女とその女性とが私の脳裡で結びつく筈もないが、他に客がいなかったので、番頭さんと三人で昔話に花を咲かせた。

こうして、文字通り充ち足りて家路についた時はまだ明るかった。改めていうまでもないが、同期の会は肩がこらない。固苦しさは始めからない。だからといってハメを外して乱れることもない。独特の雰囲気は、下町情緒とにか共通するものがあるのだろうか。次の機会を待つや切なるものがある。

(八九・一二記)

函八会

(昭和八年卒同期会)の記

35期 岡崎 弘

われわれは年一回、函八会を開催しているが、今年は五月十六日長浜市(滋賀県)十七日生駒市(奈良県)で開催と決めた。ここまで何くれと準備を進めてきてくれた及川幹事及び関西在住の加藤(敏)君、新田君、橋本君、に対し厚く感謝の意を表したい。

五月十六日、集合地長浜駅の空は明るく晴れて緑に薫る風が肌に心地よい。約束の時間が迫まるにつれて懐かしいクラスの顔が、三々五々集まってくる。白楊ヶ丘、薨の学舎を出て五十七年、既に髪は白く或いは薄くなっている者もいるが、どの顔にも若き日の面影は残っている。互いに顔を合わせて「イヤ」「オッ」と声をかけ元気な姿を確かめて、これで

仲間の挨拶が終わる。

総員十一名、皆元気一杯である。スケジュールに従って行動に移る。

この地は琵琶湖の北部に位置し、東海・北陸から京を目指す要路に当たっていたので、戦国時代には歴史の表舞台となって脚光を浴び、また江戸時代中期以降よりは浜縮緬などの織物で全国に名が知られる。

われわれは先ず秀吉の居城長浜城跡を訪れ、天守閣より遙か湖北地方一帯の地形を概観し、戦国経営足跡の一端を偲ぶ。次いで当時の兵器産業たる火縄銃の生産工場「国友鉄砲の里」や著名な浜縮緬の織布工場、及び塩ビ樹脂加工の先端化学工場等幅広く見学する。

かくて当日の予定を終え、宿舎「南浜湖畔の家」に旅装を解く。全員落着いたところで懇親会の席につく。

先ず世話人から会員消息の最近情報と翌日の行動予定等の説明があつて懇談に移る。

顧みれば卒業以来、半世紀余この間、時代の大激変期に遇い、われわれの青春はこの中に埋没して了つた感があり気がついてみたときは齢喜寿に近い。盃を重ねるに従い腕白時代の話が際限なく続く。かつては子供や孫の話が多かつたが、今は自分の病気の話が主となった。これも年の所為であろうか。それにしてもこうして一堂に集まり元気で語り合えることは本当に楽しい。やがて終宴に近く一同、なつかしい校歌「玄冥の北の一道」を声高らかに合唱、幕を閉じる。

翌十七日、快晴。われわれは車に分乗し宿より北に約十軒の渡岸寺(どうがん

じ)を訪ねる。当寺には天平時代の作と言われる国宝十一面観音菩薩立像が安置されているが、その豊かな顔容には崇高な森厳さが秘められており、一同この美しい観音さまにお参りして退場する。

当寺を出て南に約十軒、姉川古戦場を通り、眼前にはだかる伊吹山を左に見て、さらに十数軒南下すれば醒井養鱒場である。この県営養鱒場は東洋一の規模を誇るだけに池と川に群遊する無数の鱒は見ごたえがある。ここで昼食小休止後、京都を経て本日の宿泊地、生駒山宝山寺に至る。

当山の大型歓喜天は約三百年前、開祖湛海律師によって勧請された靈天であり、人気、商売の神さまとして全国的信仰を集めている。われわれは三年前にも当宿坊に泊まり同期会を開催したのでなつかしい思い出で一杯である。

ふと前回隣席にいた松田君のことを思い出す。その時は、次回同期会は是非青函博會場の函館で開催しようとする主張を実現した。しかし彼は病魔に侵され実現を見ずに世を去った。一期一会、人の世の儚さと無常を思い瞑目する。

翌十八日、七時一同揃って拜殿に静座、朝の勸行に参加する。読経の荘重な響のなかに、鬼籍に入った同期生の冥福を祈念し、また全員の健康を願って合掌する。終わった後の清々しい気持と、よき仏縁を得た有難さをしみじみ思う。

生駒山を下り最終コースの大阪「花万博」に向かう。花万博については、既にマスコミその他で大々的に取り上げているのでここに記載することは省略する。この三日間、文字通り寝食を共にし、

若き時代に還って楽しく過ごした思い出がどれ程われわれの心身活性化に役立つことか解からない。今回身体の故障その他で参加できなかった友の健康回復を祈ると共に次回はまたお互い元気で会いたいものと思っている。

△参加者▽大野、岡崎、加藤(敏)、佐々木(孝)、杉沢夫妻、新田、橋本、浜田、宮本、藪越(敬称略)

水すましのよつに

42期 菅原 茂夫

70才近くになると過去の燃えた時期が鮮烈に蘇って来ることがある。それは自分の一歩やりたかった事を苦勞しながらもやり遂げたその時期であろう。人生を平穩無事に送り得たら結構な話だが、わたしの年代は激動の時代を経ているだけになかなか平穩に過ごせなかったと思う。私の場合映画を作りたいと言う一念に燃え、或る企業の映画ではあるが、自分のシナリオ演出で7年間に30本程の作品を作ることが出来た。その関係で会社作りもし、色々な体験をすることが出来た。今迄千人にも及ぶ人との出会いと別れ——まるで水すましのような人生と言うか、水の流れに従って流されたり右に行ったり左に行ったり、一寸廻ったり——ふと振り返ってみて随分と色々なことをしたものだと思っている。私は死線を生きて来たのだから日々大切に生き、いつまで生きられるかわからないが、あのサンセットのようなフィナーレにしたい

ものだと思つ今の心境である。

佐賀寸感

60期 中角 久典
(佐賀市在住)

「思えば遠くへ来たもんだ」という言葉がありました。函館から遙か二千キロ、東京を出てから四年目、鳥取、福岡を経てここ佐賀に来て二年目になります。このところ、各地で平均二年位の転勤生活をしていますが、目下西進中。次は、さしずめ東シナ海に飛び出すことになるのだろうか。

現在、佐賀少年鑑別所長をやっています。少年鑑別所とは、皆様にはあまり馴染みのない職種ですが、「非行少年の科学的な調査及び診断を行う法務省の専門施設」なのです。

故郷を遠く離れて生活するとき、最も元気づけられ、励みになるのは、白楊だよりや三三会(昭和三十三年卒)のメンバーによる声の便りが届くときです。

ところで、佐賀はいま吉野ヶ里で一躍全国から注目を浴び、観光客が大勢押し寄せています。佐賀は、有明海と玄海灘に囲まれ、海の幸には事欠きません。中でも有明の肴は、いろいろと変わったものがあります。「海茸、たいらぎ、くちぞこ、めかじや、ぐち、えつ、わらすば、あげまき、むつごろうなどなどあるばってん、何を食べてもおいしいかよ。ぜひ一度遊びに来てくんしゃい。酒もつままあ！」

誠実に生きる

81期 及能ひろ子

先日、友人の母上が亡くなられた。事情があり二十年近く一緒に暮らしていなかったという。その間、消息不明で、或る日突然「倒れた」と連絡が入ったという。最後のお別れの時、彼女は柩に縋り号泣した。それまでの想いを洗い流すのに十分な涙であろう。自分に「生」を与えてくれた母親が亡くなった、という心底からの悲しみの涙であろう。私は、そう思わずにはいられなかった。

彼女の御家族は貧しいながらも実に誠実に生きてきた。平凡な事のようにあるが、これほど至難な事はないだろう。然も、言うに言われぬハンディを背負って。私も子どもの頃、よく母親に言われたものだ。「誠実に生きていれば、きっと良い事があるよ。たとえ自立たなくても、必ず誰かが見ていてくれるから。」と。

彼女は母親の最後の笑顔を見て泣けたと言う。一生忘れない、と言う。彼女はこれからも誠実に生きていく事だろう。切にそう願うと共に、私も今再び、母の言葉をしっかりとかみしめている。



大町郵便局正面図

新役員の紹介

一昨年十月に支部長が交替しましたが、その他の役員については副支部長四人の追加のみで、他の副支部長・理事・監事は、昨年十月の大会までの一年間留任となっていました。少々遅れましたが、今年三月二十八日の理事会で内定した人選についてその後評議員会で承認され、新役員が次のとおり決定しました。(新役員の任期は平成三年の大会までとなります。)

支 部 長	副 支 部 長	理 事	監 事
篠田 作衛 (48期)	井筒 吉彦 (43期)	三國比左男 (51期)	高橋 良一 (52期)
杉田 博子 (54期)	北原耕太郎 (60期)	吉田 淑子 (69期)	松原 竹造 (36期)
福津 達男 (52期)	野村 実 (57期)	渋谷 昌平 (58期)	真船 昭 (59期)
水沢 房子 (60期)	荒井 浩 (62期)	菅原 大作 (65期)	高木 隆 (69期)
長島 裕司 (75期)	桑原 洋子 (75期)	青木 和彦 (77期)	田沼 修二 (45期)
濱中 孝平 (48期)			

池田和行、小畑文雄両氏顧問に就任
当支部では、運営に貢献いただいた方に顧問に就任いただき、支部運営に大所高所から助言いただくことになっております。

篠田支部長より、前支部長で3年にわたり当支部を統括いただいた池田和行氏(45期)と、当支部創立以来総務・会計担当としてご尽力いただいた小畑文雄氏(30期)のお二人に就任をお願いしましたところ、快くお引受けいただきました。池田、小畑両氏を加えて、顧問は七氏となりました。

名簿について

東京支部会員名簿については、平成2年上期完成を目途に進める旨前号でもお知らせしたところですが、原稿の集まりが思わしくなく、当初の本会報に合わせて送付したいという予定は断念せざるをえなくなりました。

逸早く原稿をお寄せいただいた評議員の方には、大変申し訳なく思っております。何とか完成に漕ぎ着けたので、未提出の期は早急にご提出下さるようお願いいたします。

(送付先)
〒一六〇
新宿区新宿一―四一六(御苑ビル)
スペース販売㈱内
白楊ヶ丘同窓会東京支部

『第14回親睦大会』の日程決まる!!

第14回親睦大会の開催が決まりました。老いも若きも一堂に会し親睦を深めようではありませんか。

- ・とき 平成2年10月17日(水) 午後5:00~6:00
講演 健やかに生きる
三浦祐晶氏
懇親会 午後6:00~9:00
- ・ところ 「東京青山会館」地下鉄表参道下車
- ・会費 7,000円

会費納入のお願い

当支部の運営は、年会費によってその殆どが賄われております。お蔭さまで元年度は、別掲会計決算書のとおり好結果が得られました。引き続き皆様のご理解を賜り、会報と同送してあります『振替用紙』によって年会費をお振込みいただきたくお願い申し上げます。

詰将棋の解答と正解者発表

当会報の前号(平成元年発行)に二上達也九段(52期)に出題いただいた詰将棋の解答は、つぎのとおりです。

- (1) 3一銀成、1一玉、1二竜、同玉
2一角、1一玉、1二歩、2二玉
3二成銀引 以上9手詰
- (2) 2二竜、同金、4一馬
以上3手詰

2名の方から応募がありました。応募は少なかつたのですが、全員正解でした。2名の方には、すでに二上九段より寄贈いただいた扇面を贈呈いたしました。

- ・二問正解者
文京区本郷四の十八の一
小比賀新次氏(53期)
- ・一問正解者
大和市下鶴間一五一の一三
北原耕太郎氏(60期)



訃報

当支部評議員として活躍下さった芳賀一郎氏(38期・昭和11年卒)は、本年二月二日病のため死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記

例年になく猛暑、残暑が続きました。皆様にはお変わりなかったでしょうか。第13号をお届けいたします。

学校関係、先輩各位、会員各位のご協力に厚くお礼申し上げます。

母校の校舎の改築工事が始まりました。多年の懸案でハラハラしましたが、私たち先輩も一安心というところです。百周年を、いろいろと工夫された素晴らしい校舎で迎えられることは本当に喜ばしいことです。願わくば、東京支部の現会員全員で竣工を見届けたいものと思います。

大先輩長谷川海太郎さんを紹介しました。今後もシリーズとして先輩の紹介をしていきたいと思っています。

ところでお恥ずかしい次第ですが、この「東京白楊だより」の創刊号から第3号までが支部事務局に保存されておりません。どなたかお持ちでしたら寄贈していただければ幸いです。どうか。(事務局まで電話でこの一報願います。)

なお、『東京白楊だより』の企画についてのご意見、ご感想をお寄せいただければ幸いです。(K)

発行 白楊ヶ丘同窓会東京支部
編集責任者 北原 耕太郎
支部事務所 新宿区新宿一―四一六(御苑ビル)
〒一六〇
スペース販売㈱内
瓦(三五二)六二八一